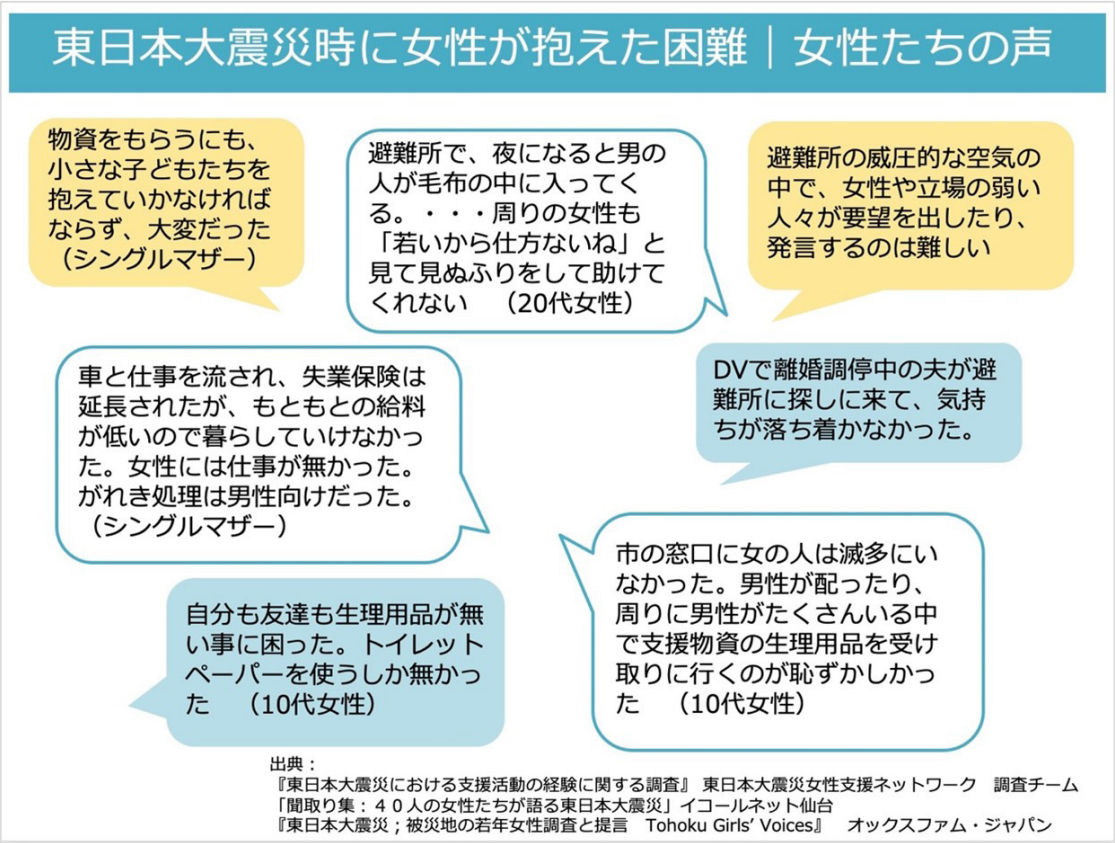
国立女性教育会館を愉しもう！〈第６回〉

災害対策にもジェンダー視点をお忘れなく！

国立女性教育会館では、男女共同参画推進を目的とする研修事業を行っていますが、その中には「災害対応研修」もあります。今回は、災害対応とジェンダー平等にどんな関係があるのか、ご紹介します！

災害は忘れた頃にやってくる…はずでしたが、最近では年に何度も日本各地が大災害に見舞われるようになりました。なんとか被害を最小限にとどめようと、国や自治体も災害対策に力を入れていますが、その際にゆめゆめ忘れてはならないのが、ジェンダーの視点です。「災害対策にまでジェンダー？」と思われるかもしれませんが、近年の被災経験から、性別によって災害の影響は異なることがわかってきました。



出典：内閣府男女共同参画局「男女共同参画の視点からの防災研修」
https://www.gender.go.jp/policy/saigai/bosai_kenshu.html

例えば、阪神淡路大震災での兵庫県の死者数は、女性が男性の 1.4 倍に上っていたことが報告されています。古い木造長屋等の倒壊で一人暮らしの高齢女性が多数犠牲になっており、経済力の有無が災害リスクに直結することが露わになりました。東日本大震災では、多くの男性の飲酒量が増えていた、という統計が出ています。仕事中心の生活を送ってきた男性たちが、被災によって役割と居場所を喪失し、孤立に陥っていることが心配されるデータです。また、被災地の女性相談にはさまざまな声が寄せられました。「避難所には生理用品もなく、治安の悪さに毎晩不安を抱えて過ごした」「家族のケア負担が増大して職場復帰できなかった」「DV を受けているが非常時だから我慢している」等々。このような悩みは災害時の「皆一丸となってこの難局を乗り切ろう」という雰囲気の中では、なかなか口に出せません。地域や家庭で立場が弱い女性たちは、復興にも立ち遅れてしまいます。

青森県八戸市での防災訓練の様子（撮影：筆者）上：女性がリーダー役となって訓練を進行　下：「この指とまれ」式で男女に関わらず炊事係に

災害時には社会構造の歪みが凝縮して現れます。男はこう、女はこう、というジェンダーの縛りがきつい日本社会では、性別による格差は文字通り致命的に作用します。弱いところが一層弱くなるのです。いま、コロナ禍で「女性不況」と呼ばれる激しい雇用悪化や家庭責任の増大に追い詰められ、女性の自殺者が急増しているのも同じ道理です。

では、どのような対策を整えておけばよいのでしょうか？ 平常時から、それぞれの事情に応じたニーズに対応しつつ、社会のあちこちに潜むジェンダー格差を積極的に是正していくことです。災害が起きてからでは間に合いません。

まずは、災害対策を考える場の構成を、男女混成にすることから始めるのが得策です。従来、地域防災を担ってきたのは、健康で社会的地位のある男性ばかりでした。そこに女性たちが加われば、一気に知見の幅が広がり、多様なニーズに対応できるようになります。

青森県男女共同参画センターが自主防災組織と協働して行った避難所訓練を見学させていただいたことがあります。地元の中学校も巻き込み、地域の人々が主体的に知恵と力を出し合う見事なしかけになっていて、これは次の災害がやってくる前に青森に引っ越しておこうか…と思うくらいでした。企画・運営は、女性防災リーダー養成講座修了生を含む男女混成チームです。当日のリーダー役や炊事係も単純に性別で割り振ることなく参加者皆で分担し、防災備蓄の品揃えや障害のある方への対応等も検証して、次回の訓練につなげていました。国立女性教育会館では来る 10 月に、このときセンター長だった方を講師に迎えて「男女共同参画の視点に立った災害対応研修」を行う予定です。

災害対策というと、土木整備や避難計画などが思い浮かびますが、ジェンダー平等も実は大きな要素なのです。過去の貴重な経験を教訓に、平常時からのジェンダー平等を実現して Build Back Better（よりよい復興）を成し遂げていきたいものです。

（丹羽　麻子／独立行政法人国立女性教育会館　事業課　専門職員）